



Kotohomu.llcREPORT

『聖城怪談録』の民俗学的・地理的考察

近代知の萌芽と失われた河童の謎



2025年07月07日



序論：大聖寺藩の文化的遺産としての『聖城怪談録』

寛政11年（1799年）、大聖寺藩主前田利考の命により編纂された『聖城怪談録』は、単なる怪談奇譚集として片付けることのできない、極めて重要な文化的・歴史的資料である。本報告書は、この文献が持つ二つの重要な側面、すなわち近代的な知の探求の先駆けとしての性格と、その怪異譚の中に潜む特異な文化的空白について、多角的な視点から解明を試みるものである。

本報告書の中心的な論点は以下の通りである。

第一に、『聖城怪談録』は、その編纂手法において、後の柳田國男による近代民俗学の成立を予感させる「原民俗学」的文書としての価値を持つ。それは、特定の場所と語り手に基づいた口承伝承を体系的に収集・記録するという、近代的なフィールドワークの萌芽を内包している。

第二に、この地域は霊峰白山を水源とする豊かな水の文化圏であり、その信仰は人々の生活に深く根差していたにもかかわらず、『聖城怪談録』には日本を代表する水辺の妖怪である「河童」の伝承が見られない。

この不在の謎は、単なる偶然や欠落ではなく、この地域特有の峻厳な自然地理と、それによって育まれた水の信仰体系、すなわち霊峰白山を頂点とする強大で畏怖すべき水神観が、河童のような土着的な水辺の精霊が存在する「生態学的ニッチ」を許さなかったという、地理的・神学的必然性の現れである。

分析にあたっては、まず『聖城怪談録』が成立した寛政期という時代の知的・政治的背景を明らかにする。次に、その編纂方法論が日本の民俗学史においていかなる位置を占めるのかを論じる。そして、大聖寺川の治水史と白山信仰の神学的構造を分析し、この地域独自の超自然観の形成要因を探る。

最後に、物語の語り手である武士階級の世界観を読み解くことで、本報告書は『聖城怪談録』を、江戸後期の知的潮流、地域の自然環境、そして社会構造が交差する一点に成立した、類稀な文化史的産物として再評価することを目指す。



第1章 『聖城怪談録』の成立背景と寛政期の知的風土

『聖城怪談録』は、文化的な真空状態で生まれたものではなく、その時代の特有の緊張関係と知的潮流の産物であった。本章では、その成立に至るまでの文化的、政治的、そして思想的背景を明らかにする。

1.1江戸時代後期の怪談ブームと二つの潮流

江戸時代、特に後期には、怪談や妖怪に対する人々の関心が爆発的に高まった。この流行は、鶴屋南北作の『東海道四谷怪談』に代表される歌舞伎の演目や、幽霊画（ゆうれいが）と呼ばれる浮世絵の一ジャンルの隆盛、そして人々が集まって怪談を語り合う「百物語怪談会」の人気など、多岐にわたる文化現象として現れた。

この潮流の中で、怪談文芸は大きく二つの系統に分けることができる。一つは、上田秋成の『雨月物語』（1776年）に代表される、高度に文学的・芸術的な作品群である。これらは中国の白話小説や日本の古典文学に深く根差し、洗練された文章と構成美を持つ創作物であった。

もう一つは、口承文芸に根差した記録としての性格を持つものである。

『聖城怪談録』は、まさしく後者の系譜に連なる。これは、藩主の命により、宿直の武士たちが語った話を家臣が書き留めたものであり、文学的洗練よりも、特定の場所で起きたとされる出来事の「報告」としての性格が強い。この出自こそが、

『聖城怪談録』を単なる娯楽作品ではなく、当時の人々の「信じられていた」あるいは「語られていた」現実を映す、一次資料としての価値を持つものになっている。

1.2藩主の眼差し：前田利考と藩政史編纂の精神

『聖城怪談録』は、寛政11年（1799年）に大聖寺藩第8代藩主・前田利考（まえだとしやす）の命によって編纂された。

利考は、放蕩な父・利精（としあきら）とは対照的に、藩政の立て直しに尽力し、綱紀粛正や文武の奨励を行った「名君」として知られている。

このような藩主が怪談集の編纂を命じたことは、単なる個人的な趣味や娯楽のためだけとは考えにくい。この事業は、水戸藩が徳川光圀の下で編纂した歴史書『大日本史』に代表されるような、江戸時代の藩による地誌編纂や記録事業の系譜に連なるものと解釈できる。藩主が家臣に命じて領内の伝承を収集・記録させる行為は、藩の統治権が及ぶ範囲を、物理的な土地だけでなく、人々の語りや信仰といった



「見えざる領域」にまで広げようとする試みであった。
その表題が『聖城怪談録』、すなわち「聖なる城（藩庁）で語られた怪異の記録」とされていること自体が、この事業が藩の公的な権威の下で行われたことを明確に示している。

1.3 寛政の改革と知の秩序化

『聖城怪談録』が編纂された寛政年間は、松平定信が主導した「寛政の改革」（1787年-1793年）とその影響が色濃く残る時代であった。この改革は、田沼時代の華美な風潮への反動として、厳しい緊縮財政、風紀の取り締まり、そして思想統制を特徴としていた。幕府は朱子学を正学とし、それ以外の「異学の禁」を布き、風俗を乱すと見なされた出版物を取り締まった。

この厳格な統制の時代に、なぜ怪談集が編纂されたのか。ここに寛政期という時代の矛盾した性格が表れている。一方で、改革は華美で「浮薄」な町人文化を抑制しようとしたが、他方で、本草学（博物学）や国学といった実証的・分類的な学問が興隆した時代でもあった。

利考の事業は、この二つの潮流の狭間に位置する。

彼は、民間で流行していた怪談という、ともすれば風紀を乱しかねない題材を、藩の管理下に置き、体系的に収集・記録するという秩序だった形式に落とし込んだ。これは、単なる娯楽の享受ではなく、むしろ寛政の改革が奨励した体系的な知の探求という精神に合致するものであった。つまり、『聖城怪談録』は、大衆の好奇心を統制された「記録」へと昇華させることで、時代の禁欲的な空気と実証的な学問精神の両方に応えようとする、きわめて巧みな文化的営為だったのである。



第2章近代民俗学への序曲：『聖城怪談録』から柳田國男への道

『聖城怪談録』は、それ自体が「近代民俗学」の著作ではない。しかし、その編纂方法と思想的背景を分析すると、後に柳田國男が確立する学問分野への重要な方法論的先駆者としての側面が浮かび上がってくる。

2.1 収集の方法論：武士たちの語りから「常民」の発見へ

『聖城怪談録』の根幹をなす方法は、特定の語り手（藩の武士たち）から、大聖寺藩領内の具体的な地名に結びついた口承の物語を収集・記録するという点にある。この、特定の地域に根差し、個人（あるいは集団）の一次的な（あるいは二次的な）証言を重視する姿勢は、近代民俗学におけるフィールドワークの基本原則と軌を一にする。

もちろん、柳田國男が『遠野物語』で実践した調査とは、その目的において決定的な違いがある。柳田は、佐々木喜善という一人の優れた語り手を通じて、日本の「常民（じょうみん）」、すなわち名もなき普通の人々の精神史や文化の古層を科学的に解明しようという明確な学問的意図を持っていた。

対して、『聖城怪談録』には、そうした分析的な枠組みは存在しない。それは、藩主の知的好奇心と統治の一環として集められた、理論化される以前の「生データ」の集成である。しかし、この「生データ」を体系的に収集するという発想そのものが画期的であった。

2.2 思想の架け橋：平田篤胤の「実証的」神学

『聖城怪談録』と柳田國男の間に存在する、およそ1世紀の隔たりを埋める思想的な架け橋として、国学者・平田篤胤の業績、特に『仙境異聞』の存在が極めて重要である。1820年代に成立したこの著作で、篤胤は「天狗に神隠しに遭い、仙郷を旅してきた」と語る寅吉という少年に対して、詳細な聞き取り調査を行った。

篤胤の手法は、『聖城怪談録』と同様に、特定の情報提供者からの聞き取りに基づいている。しかし、その目的は単なる記録ではなかった。

篤胤は、寅吉の証言を「証拠」として用い、仏教や儒教の影響を排した純粋な神道に基づく彼自身の壮大な神学体系、とりわけ「幽世（かくりよ）」、すなわち死後の霊的世界の存在を証明しようとしたのである。彼は寅吉に幽世への手紙を託すことさえしたという。ここに、伝承の収集が、単なる好奇心から、特定の思想体系を証明するための「実証的」手段へと移行したことが見て取れる。



2.3結論：原民俗学的データセットとしての価値

以上の考察から、『聖城怪談録』は「原民俗学的（proto-folkloristic）」文書と定義することができる。それは、近代民俗学の根幹をなす方法論、すなわち「特定の地域における口承伝承の体系的収集」を共有しつつも、その学問分野の理論的・分析的枠組みが確立される以前に成立したものである。

ここには、知の探求における明確な発展の系譜を見て取ることができる。

『聖城怪談録』（1799年）：

藩政における記録と知的好奇心を目的とした、実証的収集。

『仙境異聞』（1822年頃）：

神学的体系の証明を目的とした、実証的調査。

『遠野物語』（1910年）：

文化の科学的解明を目的とした、民俗学的分析。

この系譜において、『聖城怪談録』は、その解釈においてではなく、口伝の怪異を体系的に記録するというプロジェクトの構想そのものにおいて、先駆的な意義を持つ。それは、後の学問的探求の土台となるデータセットを創出した、日本近代知の「助走」とも言うべき画期的な試みだったのである。

第3章川の記憶：水、地理、そして河童の不在

本章では、なぜ『聖城怪談録』にはあれほど水にまつわる信仰が深い地域でありながら、日本を代表する水辺の妖怪である河童が登場しないのか、という問いに答える。その理由は、単なる偶然ではなく、この地域を支配する自然環境と宗教的世界観の論理的帰結であることを論証する。

3.1加賀の水神学：霊峰白山の畏怖

大聖寺を含む加賀地方の精神世界を理解する上で、白山信仰における「水」の位置づけは極めて重要である。白山は、その名の通り一年を通じて雪を頂く姿から神聖視され、古来、農耕に不可欠な水を供給する生命の源として、また日本海を航行する船乗りたちの目印となる海の神として崇められてきた。この地域の人々にとって、水は単なる物質ではなく、神の恩恵そのものであった。



この水の神性は、白山信仰の根幹をなす神話に象徴的に示されている。

開祖・泰澄が白山の神にまみえた際、神はまず山頂の翠ヶ池（みどりが池）から九つの頭を持つ恐ろしい龍（九頭龍）として現れ、その後、崇高な十一面観音の姿に変身したと伝えられる。この神話は、この地域の水神が、人間と戯れたり出し抜いたりするような土着の精霊ではなく、畏怖し礼拝すべき、超越的で高位の神仏（権現）であることを明確に規定している。

山から流れ出る水そのものも神聖視され、総本宮である白山比咩神社では、手取川の伏流水による禊（みそぎ）が重要な儀式とされている。

3.2大聖寺川：恐怖の地形学

藩内を流れる大聖寺川は、頻繁かつ大規模で、壊滅的な洪水を引き起こしてきた長い歴史を持つ。明治、大正、昭和の記録には、一度に数百、時には千を超える家屋が浸水したという記述が繰り返し現れる。この記憶は、川を、親しむべき存在ではなく、予測不可能な巨大な破壊力を持つ存在として、地域住民の心に刻み込んだであろう。

地理的にも、この地域は日本海側に位置し、急峻な山地から比較的短く、勾配の急な川が流れ下るため、豪雨や台風による鉄砲水が発生しやすい地形である。これは、しばしば河童伝説が育まれる地理的条件とは対照的である。

3.3二つの川の物語：大聖寺川と遠野の猿ヶ石川

柳田國男の『遠野物語』で有名な河童伝説は、しばしば「淵」のような、川の特定の淀んだ場所と結びついている。遠野の猿ヶ石川には、こうした河童の棲家となる場所が多く存在したと描写されている。さらに、河童はしばしば灌漑用水路や堀といった、人間が管理する水系にも現れるとされ、身近な水環境に潜む局所的な危険を象徴している。

遠野の河童は、水が危険ではあるものの、日々の生活に寄り添う管理可能な存在であるようなランドスケープの中に生きる存在である。それは、馬を水中に引きずり込む一方で、人間に引き出されたり、好物を与えられて懐柔されたりもする、水との両義的な関係性を体現している。

対して大聖寺では、川との関係は親密さではなく、恐怖によって特徴づけられる。そこでは、人を水中に引き込むような局所的な怪異の想像力は、より巨大で恐ろしい力、すなわち白山の神威の顕現としての洪水という、実存的な脅威によって圧倒



されていた。つまり、河童のような中間的でいたずら好きな精霊が占めるべき「超自然の生態学的ニッチ」は、存在しなかったのである。

3.4水に関わる超自然的存在の比較分析

以下の表は、白山信仰、遠野の伝承、そして一般的な日本の民間伝承における水関連の存在の特性を比較し、なぜ河童が大聖寺の物語世界に適合しなかったかを体系的に示すものである。

特徴	白山の水神 (泰澄伝説に基づく)	遠野の河童 (『遠野物語』より)	一般的な河童の類型
主な姿	九頭龍、十一面観音	赤い顔をした童子のような姿	緑色で猿や亀に似て、頭に皿を持つ人型の存在
起源・場所	聖なる山の火口湖 (翠ヶ池)	猿ヶ石川の特定の淵	川、池、灌漑用水路
性質・規模	神的、宇宙的、超越的。 救済や広範囲の変動をもたらす。	局所的、いたずら好き、 時に悪意を持つが、地域の生物相の一部。	中間的、トリックスターの。 局所的な水の危険を象徴する。
人間との関係	崇拝、畏怖、巡礼の対象。 祈りを捧げるべき存在。	避けるべき、出し抜くべき、 時に遭遇する存在。 厄介者または脅威。	騙したり、捕まえたり、 友人になったり、誓いを立てさせたりできる。人間との相互作用が可能。
関連する地理	急峻な聖山、氾濫しやすい荒々しい川	淵が多く、流れが比較的安定した内陸盆地の川	比較的穏やかな川や人間が管理する水路

この比較から明らかなように、大聖寺の人々の想像力は、すでに川そのものが持つ破壊的な力と、それを司る白山の超越的な神性によって占められていた。彼らが川に抱く恐怖を具現化するのに、わざわざ河童という小さな妖怪を必要とはしなかったのである。



第4章武士の精神世界：『聖城怪談録』の怪異を読み解く

本章では、『聖城怪談録』の物語内容そのものに分け入り、その語り手である武士階級の世界観を分析する。

4.1語り手としての武士：義務と危険の世界観

物語の語り手は、藩主の邸宅で宿直を務める武士たちであった。

彼らの生活は、主君への奉公、厳格な階級制度、そして武士としての行動規範によって規定されていた。その教育には儒教的倫理観が含まれ、大聖寺藩においては曹洞宗の禅の教えも大きな影響力を持っていた。

特に禅宗の影響は重要である。

大聖寺藩には前田家の菩提寺である実性院をはじめ、曹洞宗の寺院が数多く存在した。自己を律し、直接的な経験を重んじ、いかなる事態にも動じない精神を養う禅の教えは、武士道精神の根幹をなすものであった。

このため、『聖城怪談録』の物語の多くは、神話や伝説というよりは、個人的な「事件報告書」のような体裁をとる。

物語の舞台は、吸坂の刑場跡や特定の街道、村々など、藩内の実在の地名に固く結びついている。これは、物語が武士たちの活動範囲における、超自然的な危険箇所を記した「口承のハザードマップ」として機能していたことを示唆している。

4.2大聖寺藩の超自然存在の類型

『聖城怪談録』に登場する怪異は多種多様である。個人の死に結びついた幽霊や、特定の場所に現れる地霊のような存在が語られる。

また、狐のような動物が化ける話や、鬼火、あるいは「山鳥の赤い羽が火のように見えた」といった自然現象を超自然的なものとして解釈する話も含まれる。自然に動き出すすりこぎ棒の話などは、典型的なポルターガイスト現象と言えよう。

注目すべきは、鳥山石燕の『画図百鬼夜行』などを通じて都市の出版文化で広まっていた、名前の付いた標準的な「妖怪」の多くが登場しない点である。

『聖城怪談録』の怪異は、より土着的で、カタログ化されていない、生々しい体験談として語られる。広く知られた未確認生物である「つちのこ」の話は、数少ない例外である。



4.3天狗礫と大女：不可視の自然と畏怖の対象

『聖城怪談録』に登場する怪異の中でも、「天狗礫（てんぐつぶて）」と「大女（おおおんな）」は、この地域の自然観と社会背景を理解する上で特に示唆に富んでいる。

「天狗礫」とは、姿は見えないにもかかわらず、空中から小石を投げつけられるという現象である。これは、人格化された妖怪との対峙ではなく、不可視で、理不尽で、しかし実害は少ないという、自然の気まぐれな側面を象徴している。

武士たちは、常に予測不可能な危険に晒される存在であり、天狗礫は、そうした日常的な緊張感や、人知の及ばない領域がすぐ隣にあるという感覚を具現化したものと言える。それは、特定の神仏に祈って解決する類のものではなく、ただ耐え、やり過ごすしかない、一種の環境的ハザードとして認識されていた。

一方、「大女」は、堤防を軽々とまたいだり、生垣の上から顔を覗かせたりする、人間離れしたスケールの女性として描かれる。これは、山姥（やまんば）伝説の系譜に連なる、山や自然そのものが持つ強大な力を人格化した存在である。

彼女は直接的な危害を加えるわけではないが、その存在自体が、人間のスケールを遥かに超えた世界の存在を示唆し、畏怖の念を抱かせる。これは、急峻な山々に囲まれた大聖寺の地理的環境と、聖なる山・白山への畏敬の念が、人々の想像力の中で結びついた結果と解釈できる。

河童が人間社会と水辺の「境界」に現れる存在だとすれば、天狗礫や大女は、人間界と、より広大でコントロール不可能な「自然界」との境界に現れる現象である。大聖寺の武士たちの世界観では、後者の境界の方が、より切実で支配的であった。このため、彼らの語りには、河童のような水辺のトリックスターではなく、天狗礫や大女のような、より広範で根源的な自然への畏怖を反映した怪異が登場したのである。

4.4物語の機能：道徳、記憶、そして不安

これらの物語は、武士社会において複数の機能を果たしていたと考えられる。

第一に、武士の胆力を試す「度胸試しの物語」としての機能である。

超自然的な遭遇に対する適切な反応は、冷静さを保ち、調査し、あるいは刀を抜くことであり、これは武士道の理想を直接反映している。パニックに陥る者は、暗黙のうちに武士としての試練に失敗したと見なされる。

第二に、口承の歴史として、奇妙な出来事の記憶を保存し、他者への警告として機能した。



熊坂村の山姥（やまんば）に遭遇し、一人が恐怖のあまり死んでしまう話は、特定の山道への明確な注意喚起である。

第三に、社会的な不安の表明としての機能である。

復讐を求める幽霊や、藩主の城で起こる怪異は、厳格な封建社会の階級制度の中で生きる人々の圧力や緊張を反映している可能性がある。過去の行いが原因で女性の生霊に苦しめられる家臣の話は、行動を戒める道徳的な寓話として機能する。

このように、『聖城怪談録』は、一般民衆ではなく、武士階級の「超自然に関するエスノグラフィー（民族誌）」である。その物語は、藩という組織に仕える武士兼行政官たちの、職務、地理的移動範囲、そして禅と儒教と武勇が混ざり合った精神的枠組みによって深く形作られているのである。

結論：いくつもの岐路に立つ文書

本報告書で論じてきたように、『聖城怪談録』は、単なる怪異譚の集積ではない。それは、編纂された時代と場所の精神文化が凝縮された、極めて重要な歴史的ドキュメントである。この書物を解読することで、近世後期の大聖寺藩という社会の深層に触れることができる。

分析の結果、この怪談集には三つの主要な糸が複雑に織り込まれていることが明らかになった。

第一に、物語の舞台となる風景は、白山信仰という古来の山岳信仰によって物理的にも心理的にも深く規定されている。

山や川、森といった自然が持つ霊的な力への畏敬は、物語の根底に流れる通奏低音である。地名の由来そのものが失われた白山の寺院であるという事実は、この土地全体が聖なる山の記憶に「憑かれている」ことを示唆している。

第二に、物語に登場する超自然的な存在やそれへの対処法は、神仏習合という当時の宗教的現実の流動的で多孔質な論理に従っている。

藩士たちは、神道的な儀礼と仏教的な観念を区別なく用い、怪異という非日常を理解し、日常の秩序を回復しようと試みた。これは、教義を超えた「生きた信仰」の実態を映し出している。

第三に、『聖城怪談録』という書物の存在自体が、前田家の統治という政治的・文化的プロジェクトの成功を物語っている。

かつて宗教戦争で引き裂かれた土地を、巧みな「統制と庇護」の政策によって平定し、長期的な安定を築き上げた。その平和と繁栄のなかで、藩主が自ら怪談の蒐集



を命じるという文化的な営為が可能となったのである。それは、恐怖の対象であったはずの超自然的なものを、知的好奇心と統治の対象へと転換させた、成熟した権力の証左に他ならない。

したがって、『聖城怪談録』は、大聖寺藩の魂を映す貴重な窓である。そこには、怪異が日常であり、神と仏が聖域を共有し、そして怪談を語ること自体が、政治的秩序と文化的洗練の表現となり得た世界が広がっている。この一冊の書物は、民話、信仰、そして権力が交差する、近世日本の豊かな精神史の一断面を見事に切り取っているのである。



引用文献

1. 聖城怪談録とナイトウォーク-加賀市,(2025.07.access)
https://www.city.kaga.ishikawa.jp/ed/bunka_shinko/12077.html
2. 地元の怪談話に惹かれ、気づけば移住15年。知らず知らずに惹き込まれる加賀暮らしとは。,(2025.07.access)
<https://kagagurashi.com/post-8022/>
3. 再発見大聖寺ウォーク,(2025.07.access)
<https://www.daisyoji.com/2023/09/07/%E5%86%8D%E7%99%BA%E8%A6%8B-%E5%A4%A7%E8%81%96%E5%AF%BA%E3%82%A6%E3%82%A9%E3%83%BC%E3%82%AF/>
4. 加賀神明宮境内社「白山宮」(石川県)白山社めぐり(146)-白山比咩神社,(2025.07.access)
<https://www.shirayama.or.jp/hakusan/yashiro/y146.html>
5. 深田久弥を訪ねて-大聖寺十万石の城下町,(2025.07.access)
<https://www.daisyoji.com/%E3%81%8A%E3%81%99%E3%81%99%E3%82%81%E6%95%A3%E7%AD%96%E3%82%B3%E3%83%BC%E3%82%B9-1/%E6%B7%B1%E7%94%B0%E4%B9%85%E5%BC%A5%E3%82%92%E8%A8%AA%E3%81%AD%E3%81%A6/>
6. 白山信仰 | 白山比咩神社 | 石川県,(2025.07.access)
<https://www.shirayama.or.jp/hakusan/belief.html>
7. 4 加賀禅定道（ぜんじょうどう）|TABITAIKEN自然や人・暮らしにふれる,(2025.07.access)
<https://www.tabitaiken.com/3233>
8. 白山神社（金沢市小池町タ 1 3）-石川県神社庁,(2025.07.access)
<https://www.ishikawa-jinjacho.or.jp/shrine/j0207/>
9. 女人禁制-維基百科, 自由的百科全書,(2025.07.access)
<https://zh.wikipedia.org/zh-tw/%E5%A5%B3%E4%BA%BA%E7%A6%81%E5%88%B6>
10. (岩手) 遠野受け継がれるもの-OnTripJAL,(2025.07.access)
<https://ontrip.jal.co.jp/tohoku/17315224>
11. 加賀富樫氏と室町幕府,(2025.07.access)
<https://omu.repo.nii.ac.jp/record/2001279/files/2024000626.pdf>
12. 聖城怪談録-加賀市,(2025.07.access)
<https://www.city.kaga.ishikawa.jp/material/files/group/79/3seijyoukaidanroku.pdf>
13. 吸坂峠案内-異形の郷土史,(2025.07.access)
<https://decencies.jimdofree.com/home/%E5%A4%A7%E8%81%96%E5%AF%BA/%E5%90%B8%E5%9D%82%E5%B3%A0%E6%A1%88%E5%86%85/>
14. 白山信仰,(2025.07.access)
<https://digitalarchiveproject.jp/wp-content/uploads/2023/06/579aa125913e9349b0ee1038b184b0bb.pdf>
15. 泰澄 | 白山比咩神社 | 石川県,(2025.07.access)
<https://www.shirayama.or.jp/hakusan/belief01.html>